

第 55 章

モロナイ 8 - 9 章

はじめに

キリストに従う多くの人々が義を捨ててこの世の誘惑を追い求める現代にあって、忠実な教会員に期待されることは何だろうか。エズラ・タフト・ベンソン大管長（1899 - 1994 年）は次のように述べている。「モルモン書に記録されている、モルモンが息子モロナイにあてた最後の手紙を読むと、現代にも当てはまる勧告を見つけることができます。モルモンとモロナイは、民がこの地の神すなわちイエス・キリストに従わなかったために、キリスト教文明全体が滅んでいくさまを目の当たりにしていました。モルモンはこのように書いています。『さて、愛するわが子よ、彼らがかたくなであっても、わたしたちは力を尽くそう。働くことをやめれば、わたしたちは罪の宣告を受けるに違いない。わたしたちには、あらゆる義の敵を打ち破って、神の王国で安息を得るために、この土の幕屋に宿っている間に果たさなければならない務めがあるからである。』（モロナイ 9：6）わたしたちは、皆同じように敵に打ち勝って神の王国で安息につくためになすべき務めがあります。』（『聖徒の道』1988 年 1 月号, 92）

モルモン書の終わりが近づくにつれ、^{しよくざい}贖罪の力が宣言され、ニーファイの民が急速に深い邪悪に落ちていく中、義の大義に忠実であり続けるモルモンの姿が描かれている。モルモンが息子モロナイにあてた手紙からは、罪がもたらす避けることのできない結果と「心の鈍い」状態が引き起こす言語に絶する邪悪さが読み取れる。モロナイ 8 - 9 章は、福音の第一の原則と儀式に従って生活することの大切さについて、貴重な洞察を与えている。

注解

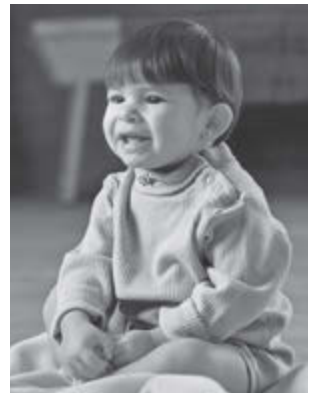
モロナイ 8：1 - 8 幼い子供たちへのバプテスマが禁じられる

●モロナイ 8 章には、モロナイが父モルモンから受け取った手紙の内容が書かれており、その中でモロナイは幼い子供たちにバプテスマが必要かどうかについて答えている。この教義に関する質問に対して、モルモンが主からの直接の啓示によって答えていることに注目する（モロナイ 8：7 参照）。バプテスマの儀式は「^{ゆる}罪の赦しのため」にある（教義と聖約 49：13）。しかし、幼子には罪がない。実際、教義と聖約には、幼子は罪を犯すことができないし、サタンも彼らを誘惑することはできないと書かれている。

「^{あがな}幼い子供たちは、わたしの独り子によって世の初めから贖われている。

それゆえ、彼らは罪を犯さない。彼らがわたしの前に責任を負うようになるまで、サタンは幼い子供たちを誘惑する力が与えられないからである。」（教義と聖約 29：46 - 47）

主は、8 歳を責任の取れる年齢として定められた（ジョセフ・スミス訳創世 17：11；教義と聖約 68：25 参照）。原罪、あるいはアダムののろいを取り除くために幼児にバプテスマを施す人は、神と神の計画を正しく理解せずに行っているのである（モロナイ 8：8 参照）。



モロナイ 8：3

この聖句は、義になつた父親から息子に対する愛をどのように表しているか。この聖句は、キリストを中心とした関係に対してどのような理想を示しているか。

モロナイ 8：8 「割礼の律法〔は〕わたしによって廃されている」

●神はアブラハムに言われた。「わたしはあなたと割礼の聖約を立てよう。これは、わたしと、あなたおよびあなたの代々後の子孫との間の聖約となる。子供は八歳になるまでわたしの前に責任を負わないことを、あなたがとこしえに知るためである。」（ジョセフ・スミス訳創世 17：11）その後、神はさらに続けてアブラハムに、割礼は「わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなるであろう」と言われた（^{きよ}創世 17：11）。しかし背教により、古代の多くの人々が、男子を聖めるには割礼が必要だと信じるようになった。

割礼の律法はもともと、永遠に続くものとされてはいなかった。救い主の言葉がモルモンに示された。「割礼の律法〔は〕わたしによって廃されている。」（モロナイ 8：8）教義と聖約には、割礼の律法が廃止された理由が書かれている（教義と聖約 74：2 - 7 参照）。

モロナイ 8：9 - 15 幼い子供たちにバプテスマを施すことは「神をひどくあざける行為」である

●モルモンは幼児にバプテスマを施す行為を強く非難し「幼い子供たちにバプテスマを施すことが、神をひどくあざける行為」であると宣言した（モロナイ 8：9）。預言者ジョセフ・スミス（1805 - 1844 年）は、^{しよくざい}幼児のバプテスマは神の性質とイエス・キリストの贖罪によって人を救う力を否定するものであると教え、次のように述べた。「幼い子供たちにバプテスマを施さなければ、あるいは水をかけなければ、彼らが地

獄に落ちるという教義は偽りの教義であり、聖文にその根拠はない。またそれは、神の性質とも相いれないものである。すべての子供たちはイエス・キリストの血によって贖われており、子供たちがこの世を去る瞬間に、アブラハムの懷に迎え入れられるのである。」(History of the Church, 第4巻, 554)

モロナイ 8:22 - 24 「律法のない者」

• 多くの人は、キリストの律法を知ることなく生活し、死んでいく。そのような人々は霊界で福音を教えらる。彼らはそこで信仰を行使し、自分の罪を悔い改める機会を与えられるのである。地上で身代わりとなる人が彼らのために必要な儀式を施すことで、救いの祝福が彼らのものとなり得る。



© 1985 ロバート・ハレット

福音を理解する能力のない人は、罪に定められない。彼らは幼い子供たちと同様に「キリストによって生きている。」(モロナイ 8:12。教義と聖約 29:49 - 50 も参照)

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長 (1876 - 1972 年) は次のように説明している。「彼らはバプテスマを受けることがなくても贖わ

れており、神の日の栄えの王国に行くだろう。そこで、彼らの能力やほかの足りない部分が、御父の恵みと正義によって回復されると、わたしたちは信じる。」(Answers fo Gospel Questions, ジョセフ・フィールディング・スミス・ジュニア編, 全 5 巻 [1957 - 1966 年], 第 3 巻, 21)

モロナイ 8:25 - 26 「柔和で心のへりくだった状態」

• モルモンは、キリストを信じる信仰、悔い改め、バプテスマ、聖霊の賜物、罪の赦しの関係について述べ、罪の赦しは柔和で心のへりくだった状態を生じると教えた。

七十人のフランシスコ・J・ビーナス長老は、柔和で心のへりくだった人の特徴について次のように述べている。「柔和で心のへりくだった状態になり、聖霊を伴侶とすることに喜びを感じる人は、人を怒らせたり、傷つけたりしようという望みを持つことがなく、人のいかなる攻撃にも影響を受けません。そのような人は、自分の伴侶と子供に愛と敬意をもって接し、交わる人々と良い関係を築きます。また、教会で指導者としての責任を持つときも家庭と同じ原則を用い、家庭という囲いの中でも、教会でも、人と接することにおいて何ら変わらないことを教えてください。」(『リアホナ』2004 年 4 月号, 39 - 40)

モロナイ 8:26

罪の赦しを受けると、どのように聖霊を感じられるようになるか。聖霊を受けた後、それをずっと受け続けるにはどうしたらよいか。

モロナイ 8:28 - 29 「御霊がすでに彼らを励ますのをやめている」

• 十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老 (1915 - 1985 年) は、男女が福音の光と知識を拒むとき、聖霊を伴侶とすることができなくなると述べている。「多くの人が肉欲の道を歩み、御霊の促しに反して進むことを選んでいる。御霊が影響を及ぼすことができないほどに良心をまひさせることは可能であり、人はまともなことや啓発的なことなど、もはやどうでもよくなってしまふ。『わたしの御霊はいつでも人を励ますわけではないからである、と万軍の主は言う。』(教義と聖約 1:33)」(A New Witness for the Articles of Faith [1985 年], 260)

モロナイ 9:3 - 5 怒り

• モルモンがニーファイの民に厳しく神の言葉を告げると、彼らは自分に対して「身を震わせて……怒 [る]」と記している (モロナイ 9:4)。そのような反応は、義の原則に対して心をかたくなにした人々に見られる霊的な状態と一致している。ヤレドの民はエテルを拒み、彼を殺そうとした (エテル 13:22 参照)。エルサレムの住民はリーハイの命をねらおうとした (1 ニーファイ 1:19 - 20 参照)。アモナイハの不義な人々は激しい怒りのあまり、信者を焼き殺し、彼らの聖文をすべて焼いてしまった (アルマ 14 章参照)。神の言葉に対するこのような反応は、邪悪がさらに進んだ状態を示しており、それはしばしば町や社会を完全に破壊するまでに至る。

• 今日、多くの人が、自分は自分自身の怒りの被害者であると信じている。七十人のリン・G・ロビンズ長老は、人は怒るという反応をするかしないかを選ぶことができると説明している。

「サタンの策略の巧妙な点は、怒りを選択の自由の支配下から切り離すことにより、自分は自制できぬ感情の犠牲者だと、わたしたちに信じ込ませることです。『かっとなる (I lost my temper)』という言葉を目にします。かっとなって自制心を失うという言葉は、興味ある単語を選んで組み合わせられています。これは広く一般的に使われている慣用語でもあります。『何かを失う』という表現は、『故意にはな

い』『たまたまそうなった』『好んで行ったことではない』、恐らくは『責任を問われない』不注意による出来事かもしれませんが、いずれにしても『責任がないこと』という意味を含んでいます。

『彼がわたしを怒らせたんです。』これもよく耳にする言葉で、同様に、自らをコントロールせず、選択の自由を行使していない状態を表しています。このような迷信は正体を暴かなければなりません。わたしたちを怒らせる人などいないのです。だれかがわたしたちを怒らせるのではありません。何ら強制力は働いていないのです。怒りは意識的に選ぶものであり、意志に基づいて決めることなのです。ですから、わたしたちは怒らないという選択が可能なのです。わたしたちが選ぶのです。

『しかし自分ではどうすることもできません』という人に、ウィリアム・ウィルバンクスは『それはたわごとだ』と答えています。

『争いを好む……怒りを抑える、怒っていることを人に話す、金切り声を上げる、大声でわめく』などの行為はすべて、怒りに対処するために計算のうえで行う戦術です。『わたしたちは過去の経験から効果が実証されているものを選んでいるのである。わたしたちは職場の上司に不満を持っていても感情を抑えて我慢できるにもかかわらず、友人や家族からうるさくされると我慢できないことに気づいているだろうか。』(‘The New Obscenity,’ *Reader’s Digest*, 1988 年 12 月号, 24, 強調付加) (『聖徒の道』1998 年 7 月号, 86 参照)

モロナイ 9:5 愛を失う

●怒りと邪悪がもたらす悲劇の結果の一つは、御霊を失うことである。御霊を失うと、人はほかの人を愛する能力を失ってしまうことを、モルモン書ははっきりと教えている。邪悪なニーファイの民もこのような状態にあった。愛を失った結果は離婚、虐待、放棄であり、これらはすべて現代にはびこる問題である。

七十人定員会会長のデビッド・E・ソレンセン長老は、家庭でどのように愛が失われるかについて次のように述べている。「今日ほとんどの大衆文化で、赦しや優しさという徳は軽視され、一方であざけり、怒り、厳しい批判が奨励されています。注意を払っていないければ、わたしたちは家庭や家族の中でこれらの習慣のとりことなり、やがて伴侶や子供、親戚を批判している自分に気づくでしょう。自分の最も愛する人々を、利己的な批判で傷つけることのないようにしましょう！ 家族の中で、もしささいな口論やわずかな批判が放っておかれるなら、それらは関係を破壊し、激しさを増して仲

たがいや、さらには虐待や離婚に至ることさえあるのです。そうではなく、……わたしたちは『大急ぎで』口論を鎮め、あざけりを取り除き、批判をなくし、恨みや怒りを取り去らなければなりません。一日たりとも、そのような危険な感情を反芻してはなりません。」(『リアホナ』2003 年 5 月号, 11)



モロナイ 9:6

モルモンは、自分やモロナイが「働くこと」をやめたらどんな結果が起こると言っているか。彼の言葉は、困難にあってもあきらめないことについて、どんなことを教えてくれるか。

モロナイ 9:9 純潔と徳は「あらゆるものに勝って最も大切に貴いもの」である

●モルモンは純潔と徳は「あらゆるものに勝って最も大切に貴いもの」と述べてた(モロナイ 9:9)。ゴードン・B・ヒンクレー大管長(1910 - 2008 年)は純潔を守ることの大切さについて次のように教えている。



「さて、若人の皆さんにとって、最もありふれたものでありながら最も対処の難しい問題があります。それは、皆さんとほかの人々との関係についてのものです。皆さんは人間の本能の中で最も強力なものと日々かわっています。正しく生きようという意志のみがその本能を凌駕します。」

主は、偉大な目的のために、わたしたちを魅力的な者としてくださいました。しかし、よくコントロールされないかぎり、この魅力は危険をはらんだものとなるのです。正しく扱われれば、すばらしいものとなります。しかし、手に負えなくなると、命取りになります。

わたしの愛する友である若人の皆さん、性に関して皆さんは何が正しいか知っています。皆さんはいつ自分が危険な場所を歩んでいるか、また、いつ、つまずいたり罪の落とし穴

に落ちたりしやすいかを知っています。皆さんがよく注意して、転落しやすい罪の崖^{がけ}縁から遠ざかり、安全な道を歩んでくださるよう、切に願っています。性的な罪という、人を落胆させる害悪、暗闇から遠ざかって、自らを清く保ってください。主の戒めに従うことからたらされる平安という、日の光の中を歩んでください。

さて、一線を越えて、もうすでに罪を犯した人はどうなるのでしょうか。希望はないのでしょうか。もちろんあります。心から悔い改めれば、その罪は赦^{ゆる}されます。悔い改めのプロセスは祈りから始まります。主は言われました。『自分の罪を悔い改めた者は赦され、主なるわたしはもうそれを思い起こさない。』（教義と聖約 58：42）できれば、その重荷を両親と分かち合ってください。そしてどのようなときでも、皆さんを助けようと待ちかまえているビショップに告白してください。」（『若人への預言者の勧告と祈り』『リアホナ』2001年4月号、39）

・性的な虐待の被害者は、純潔の律法を犯したことにはならないことについて、十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老は次のように述べている。

「^{あかし}厳粛に証します。暴力、倒錯的行為、近親者からの性的虐待によって、自分の気持ちを踏みにじられ、ひどく傷つけられたとしても、あなたの責任ではありません。罪悪感を持つ必要ありません。虐待によって傷を受けるかもしれませんが、それをそのままにしておく必要はありません。あなたが自分のなすべき分を果たすなら、永遠の計画、主の定められた時に従って癒^{いや}しを受けることができます。……

現に虐待を受けている人、過去に受けたことのある人は、今助けを求めてください。……

ビショップを信頼して話してください。ビショップの責任は、主の器としてあなたのために働くことです。ビショップはあなたの傷を癒すために教義的な土台を与えてくれることでしょう。永遠の律法を理解し、実践するなら、必要な癒しを受けることができます。ビショップはあなたのために靈感を受ける権利を受けています。ビショップはあなたの祝福のために、神権を行使することができます。」（『聖徒の道』1992年7月号、36）

モロナイ 9：18 - 20 「心〔が〕鈍い」

・モルモンは息子モロナイに、民が霊的に悲惨な状況にあり、「道義心のない、心の鈍い」状態に陥っていると伝えた（モロナイ 9：20）。十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老（1926 - 2004 年）は聖霊の促しに従うことや神の戒めを守ることをやめると、わたしたちもこのような状態になり得ると述べた。

「感じる能力は多くの方法でわたしたちの行動をコントロールする。そして、善を行うように促されてもそれに従わないでいると、感じる能力を鈍らせてしまうことになる。イエスは周囲の人々の必要に非常に敏感だったため、それにこたえて行動することがおできになったのである。

その対極に、ニーファイの不義な兄たちのような人々の霊の状態がある。ニーファイは兄たちが霊的な事柄に対してますます心が鈍くなっていったと記している。『〔神は〕静かな細い声で語りかけましたが、あなたがたは心が鈍っていたので、その言葉を感じることはできませんでした。』（1 ニーファイ 17：45）

あまりに厚い過ちの皮で覆われるようになると、わたしたちの霊のアンテナは感度を失い、わたしたちは、いつの間にか境界線を越えて滅びに至ってしまう。これは文明全体にも起こり得る。モルモンは息子モロナイに、ニーファイの民の社会の墮落について嘆きの言葉をつづっている。モルモンは、民の邪悪極まりない状態の一つを『心の鈍い』という言葉で表現している（モロナイ 9：20）。使徒パウロはエペソの教会員が欲望のままに生きて感受性を失い『無感覚』になったために、破滅的な放縦に身をゆだねていることを嘆いた（エペソ 4：19）。性的不道徳が氾濫した社会は、苦しむ会員の必要をほんとうの意味で感じるができない。それは彼らが、外に向ける愛をはぐくむことができず、内向きで自己中心的な愛しか持てないからである。神が促す静かな細い声に心を向けられないでいると、たとえ耳があっても、神からの促しだけでなく、人々の嘆願の声も聞こえない状態に陥ってしまう。」（A time to Choose [1972 年], 59 - 60）

・十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、御霊^{みたま}を失うことにつながる現代の傾向について次のように警告している。

「世の中はますます騒がしくなっています。服装や身だしなみ、立ち居振る舞いは慎みを欠き、いいかげんなものになっています。がらがん鳴り響く騒々しい音楽、品位のない歌詞、サイケデリックなライトなどは、薬物文化ともいう時代の特徴を表しています。様々に形を変え、このような事柄が広く受け入れられ、若者に影響を及ぼしているのです。……

騒音や興奮、争いが増え、慎みや気品、規律が減るということは、偶然起きたのでもなく、無害でもありません。

軍隊が敵を侵略するとき、司令官が出す最初の命令は、征服しようとする敵の通信連絡網を破壊することです。

敬虔^{けいけん}さを失わせることは、まさしくサタンのもくろみなのです。知性と霊性の両方における啓示の伝達経路を妨害することになるからです。」（『リアホナ』1992年1月号、24）

モロナイ 9:25 「キリストの栄光……を願う望み」

• ニール・A・マックスウェル長老は、モルモンが語ったイエス・キリストへの信仰に関連した望みについて次のように説明している。

「毎日使われる『希望』という言葉の中には、特定の事柄を特定の時期に達成することへの『希望』が含まれています。わたしたちは、世界経済の回復を『希望』するでしょうし、愛する人の訪問を『希望』します。それらは真心からの、しかし一時的な希望と言えます。

失望はしばしば、この一時的な希望が実現されないために起こります。しかし今日わたしがお話したいのは、永遠の希望の必要性についてです。

永遠の希望はほかと性質を異にし、イエスとその偉大な贖罪に結びついています。また、その結果として与えられる万人の復活と貴重な機会、すなわち自由をもたらす悔い改めを实践し、聖文にある『完全な希望の輝き』を得ることと関連しています（2 ニーファイ 31:20）。

モロナイは確認して言いました。『あなたがたは何を望めばよいのであろうか。見よ、わたしはあなたがたに言う。あ

なたがたは、キリストの贖罪……を望まなければならない。』（モロナイ 7:40 - 41。アルマ 27:28 も参照）このように真の希望は、移り変わるものではなく、永続する不滅のものと結びつくのです。』（『リアホナ』1999 年 1 月号, 66）

モロナイ 9:26 父なる神の恵みと主イエス・キリストの恵み

• モルモンは、モロナイがニーファイ人の罪悪のために、押しつぶされるような困難に直面していたことを知っていた。しかしまた、モロナイが神の恵みによって助けられ、堪え忍ぶことができることも知っていた。『真理を守る』には、神の恵みによって日々の困難を耐え抜く力が与えられることについて書かれている。

「聖文で用いられている『恵み』という言葉は、おもにわたしたちが主イエス・キリストの贖罪を通じて受ける神聖な助けと力を指しています。……

最終的な救いを得るために恵みが必要なだけでなく、日々の生活の中でも救いを可能にする恵みの力が必要です。熱心に、謙遜に、また柔和な心で天の御父に近づくようにするとき、天の御父はその恵みを通してあなたを引き上げ、強めてくださいます。』（『真理を守る』180 - 181）

理解を深めるために

- モルモンは、幼児のバプテスマを非難するのにどのような強い言葉を使ったのだろうか（モロナイ 8 章参照）。モルモンはなぜそれほど強い憤りを感じたと思うか。
- レーマン人とニーファイ人が同じように邪悪だったのなら、なぜレーマン人は滅ぼされなかったのだろうか（モロナイ 8:27 - 29 参照）。
- モロナイは 8 章から 9 章の中で、ニーファイの民がどのような段階を経て墮落していったと書いているだろうか。わたしたち自身の生活の中で、背教と邪悪な行いを避けるにはどうしたらよいだろうか。

割り当ての提案

- 子供たちにはバプテスマが必要ないという教義的な理由を説明する短い文章を書く（モロナイ 8:4 - 23 参照）。
- 「悪に取り巻かれる中で、義を守って堪え忍ぶにはどうしたらよいか」というテーマで、お話やレッスンを準備する。その際、モロナイ 8 - 9 章に書かれている原則や教義を使う。



第56章

モロナイ10章

はじめに

モロナイは記録を終えるに当たり、読者に向けて3つの重要な原則について語った。第1に、学ぶことと、この神聖な記録に書かれている真理について証を得る必要性に焦点を当てた。第2に、わたしたちが得ることのできる霊的な賜物を理解し、得るようにと勧めている。最後に、わたしたち一人一人にキリストのもとに来て、キリストによって完全になるように懇願している。

モルモン書の研究を終えるに当たり、これらの原則を探すようにする。モロナイの約束に従うことによって、この書物が真実であることを知るようになる（モロナイ10：3－5参照）。御霊の賜物について学び、主が与えてくださったこれらの賜物を伸ばすように願い求める。そして、最終的には、あなたがキリストのもとに来るよう日々努力していることを行動によって示す。

預言者ジョセフ・スミス（1805－1844年）が宣言した次の言葉を思い出す。「わたしは兄弟たちに言った。『モルモン書』はこの世で最も正確な書物であり、わたしたちの宗教のかなめ石である。そして、人はその教えを守ることに、ほかのどの書物にも増して神に近づくことができる。』（*History of the Church*, 第4巻, 461；モルモン書の序文）

注解

モロナイ10：3 「あなたがたはこれを読むときに」

・ジーン・R・クック長老は七十人として奉仕していたとき、神の憐れみについて深く考えることの大切さと、それによって信仰が強められ、より謙遜になることについて話した。

「『モロナイ10：3』の最後の部分に『それを心の中で深く考えてほしい』という大切な勧告が記されている。考えるべき『それ』とは何を示しているだろうか。その答えは『アダムが造られてからあなたがたがこれを受けるときまで、主が人の子らにどれほど憐れみをかけてこられたか』である。わたしたちは、天の御父がわたしたちに対していかに善良で、愛と救済の精神にあふれ、先見の明を持った御方であることを心に留めなければならない。

主が人類にどれほど憐れみをかけてこられたかを思い巡らし始めるとき、通常どのようなことが起きるだろうか。わたしたち一人一人にどのような変化が起きるだろうか。祝福を数え上げたり、主の救済を請わなければならない罪を思い出したり、自分自身の生活に主の御手が置かれていることを思い起こしたりするときに、どのようなことが起きるだろうか。わたしたちの心が愛と感謝で満たされ、主に向けられるようにならないだろうか。信仰と謙遜が増さないだろう

か。まさに、そうである。それこそ、3節が持つ影響力であるとわたしは考える。その勧告に従うことによって、わたしたちはさらに謙遜になり、さらに喜んで、心を開いて新しい情報や知識を受ける備えができるようになる。』（“Moroni’s Promise,” *Ensign*, 1994年4月号, 12）

モロナイ10：4－5 〓 モルモン書の証を受ける

・十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、御霊によってモルモン書の証を受けた経験を次のように語っている。

「わたしはモルモン書を初めて最初から最後まで読んだとき、次の約束も読みました。『もし読んだこと』が真実かどうかキリストの名によって永遠の父なる神に問う〔ならば、そして〕キリストを信じながら、誠心誠意問うならば、神はこれが真実であることを、聖霊の力によって〔わたし〕に明らかにしてくださる。』（モロナイ10：4）この勧めについて知ったわたしは、勧めに従ってみることにしました。



すぐに示現を受け、すばらしい経験ができるものと期待していましたが、そのようなことは起こりませんでした。しかし、良い印象を持ち、信じるようになりました。……

どこのだれであろうと、モルモン書を読む人は靈感を受けることをわたしは知りました。……

わたしの場合、証は突然にわき上がってはきませんでした。しかし、次第に大きくなりました。……

何度か読んでも、力強い証が得られないかもしれませんが、落胆しないでください。そのような場合、ただモルモン書に登場するあの弟子たちと同じだけかもしれないのです。彼らは大いなる栄光のうちに神の力で満たされても『それを知らなかった』のです（3ニーファイ9：20）。

最善を尽くしてください。』（『リアホナ』2005年5月号, 6－8参照）

・十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老（1915－1985年）は、モルモン書の証を得るために、読みながら心の中で問いかける方法についてさらに洞察を与えている。

「真理を知りたいと思う人ならだれでもできる、もう一つの簡単な方法があります。それは、ただひたすら読んで考えて、祈ることです。すべて信仰を持ち、心を開いて行います。

重要な問題を常に認識できるようになるためにも、モルモン書を読んで、考えて祈るときに、自分に次の質問を 1,000 回問いかけてみます。『この本を人が書けただろうか。』

そうすれば、1 回目から 1,000 回目までのうちにいつか必ず質問の答えが与えられると保証できます。真心から熱心に真理を求める人は、御霊の力によって、モルモン書が今日の全世界の人々にあてられた主の御心であり、精神であり、声であることが分かるでしょう。』（『聖徒の道』1984 年 1 月号, 131）

・ゴードン・B・ヒンクレー大管長（1910 - 2008 年）は、モルモン書を読む人々に対して、以下のチャレンジと約束を与えた。

「わたしは全世界の教会員と友人の皆さんに一つのチャレンジをします。モルモン書を読んでください。あるいはもう一度読み直してください。……

わたしは皆さんに、何のためらいもなくはっきりと約束します。これまで何度読んだかに関係なく、皆さん一人一人がこの簡単なチャレンジを実行するなら、皆さんの生活や家庭の中に、さらに豊かに主の御霊が注がれるようになるでしょう。そして、主の戒めに従って歩もうとする決意が強められ、神の御子が確かに生きておられることがさらにはっきりと分かるようになることでしょう。」（「力強い真実の証」『リアホナ』2005 年 8 月号, 6）



© Basanth.com

モロナイ 10:3 - 5

モルモン書の証を得ようと、真心から真理を求めようとする人の行動が、どのような言葉で説明されているか。

モロナイ 10:4 「誠心誠意」

・十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老は、モロナイの約束の中に記されている「誠心誠意」について次のように述べている。「モロナイは、仮説的、あるいは学術的な理由から、モルモン書が真実かどうかを知りたいと願う人々に対しては、たとえ『誠心誠意』祈ったとしても、聖霊の示しがあるとは約束しませんでした。モロナイの約束は、もしその

示しを受けたら、それに従って行動する決意をしている人に対して与えられたのです。それ以外の理由に基づく祈りは、『誠心誠意』なされた祈りではないので、何の約束も受けません。」（*Pure in Heart* [1988 年], 19 - 20）

モロナイ 10:8 - 18 御霊の賜物

・ブルース・R・マッコンキー長老は御霊の賜物を得る目的と理由を次のように述べている。

「〔御霊の賜物の目的〕は、忠実な人々を啓発し、励まし、教化し、この世で平安を得、後の世で永遠の命を受けられるように導く。御霊の賜物が存在することは、主の御業が神からのものである証拠であり、御霊の賜物がないところには、神の教会、神の王国は存在しない。これらの賜物は、人々が不信仰になるときでなければ、世界のあるかぎり決してなくなり、と約束されている（モロナイ 10:19）。しかし、完全な日が訪れ、聖徒たちが昇栄を勝ち得るとき、もはや御霊の賜物は必要なくなる。パウロが記しているように『全きものが来る時には、部分的なものはすたれる』のである（1 コリント 13 章）。

忠実な人々は、真心から御霊の賜物を願い求めるように期待されている。人々は『熱心に最善の賜物を求め』（教義と聖約 46:8; 1 コリント 12:31）、『霊の賜物を……求め』（1 コリント 14:1）、『惜しみなく与える神に願い求める』（教義と聖約 46:7; マタイ 7:7-8）べきである。ある人にはある賜物、またある人には別の賜物が与えられ、『ある人にはそれらすべての賜物を持つことが許されて、一人の長がいるようにし、すべての会員がそれによって益を得るためである。』（教義と聖約 46:29）」（*Mormon Doctrine*, 第 2 版 [1966 年], 314）

・十二使徒定員会のマービン・J・アシュトン長老（1915 - 1994 年）は、「必ずしも目立つものではないが、非常に大切な賜物」を幾つか挙げ、「その中には皆さんが持っている、目立たないながらも有益な賜物もあるでしょう」と語っている。

「このあまり目立たない賜物とは、実際どのようなものがあるのでしょうか。人に質問をする、人の話に耳を傾ける、静かな細い声に聞き従う、人のために嘆き悲しむ、争いを避ける、人当たりが良い、むなしい言葉を繰り返さない、義を追い求める、キリストの弟子としてふさわしい生活をする、人々に関心を向ける、物事を深く考える、祈りをする、力強い証を述べる、聖霊を受ける、など様々な賜物があります。」（『聖徒の道』1988 年 1 月号, 20 参照）

・ボイド・K・パッカー会長は、御霊の賜物を得ることについて、次のような勧告を与えている。

「わたしが強調したいのは、『賜物』という言葉が非常に重要だということです。無理に求めて得ようとするなら、それは賜物ではありません。差し出されたものを受け取って初めて賜物と言えるのです。

霊的な賜物もやはり賜物ですが、それを受けるには、それを与えてくださる方が定める条件に基づいていなければなりません。霊的な賜物は強制的に得られるものではありません。賜物は賜物だからです。もう一度繰り返しますが、霊的な賜物は、強制して得られるものでも、お金で買えるものでもありません。また、何らかの代価を支払ったからといって、それに対して自分の思惑どおりに、自動的に与えられると期待できるものでもありません。

霊的な賜物を執拗^{しつよう}に求めるあまり、かえって賜物を遠ざけてしまっている人もいます。そのような人は、賜物を必ず得ようという執拗さと決意ゆえに、自分の身を霊的な危険にさらしているのです。霊的な賜物はむしろ、それを受けるにふさわしく生活するとき、主の御心^{みこころ}によって与えられるものなのです。

かつてブリガム・ヤングが語ったことは、現代にもそのまま当てはまります。

『人が、神の民に与えられる啓示に従って生活するなら、確かに主の御霊を受けるでしょう。また、主の御霊によって主の御心を示され、この世の業においても、霊的な業においても、その義務を果たせるように必ず導きを受けるでしょう。この点に関して、わたしはあることを確信しています。それは、わたしたちは与えられた特権より霊的にはるかに低い状態で生活しているということです。』(Discourses of Brigham Young, 32)。

霊的な賜物はこの教会に属するものであり、霊的な賜物が存在することは、福音が真実であることを証明する偉大で普遍的証です。霊的な賜物は教会にとって、あってもなくてもよいというものではありません。モロナイは、もし霊的な賜物がなければ『人はひどい状態にある』と教えました。

わたしたちは、主が命じられた方法に従ってこれらの賜物を受けるにふさわしくあるよう、願い求めなければなりません。

もう一度繰り返しますが、わたしたちは主の方法で霊的な賜物を求めなければならないのです。』(“Gifts of the Spirit” [ブリガム・ヤング大学, 16 ステーク合同ファイヤサイドでの説教, 未刊, 1987 年 1 月 4 日], 5 - 6)

モロナイ 10:17 - 18 どうしたら、御霊^{みたま たまもの}の賜物の現れを経験できるだろうか

• ジーン・R・クック長老は、各人に与えられている御霊の賜物を発見し、活用することで得られる力について話している。「人生で経験するすばらしい過程の一つは、自分自身を発見し、神から与えられたこれらの賜物や能力を見いだすことです。神はあなたにすばらしい才能を与えておられ、あなたはまだそのほんの一部しか利用し始めていません。それらの賜物に通じる扉の鍵^{かぎ}を開けられるよう主が助けてくださると信じてください。中には、自分の心の中に限界を作り上げてしまった人もいます。わたしたち一人一人の中には、文字どおり天才が眠っているのです。それに反することは、だれの言葉も信じないでください。」(“Trust in the Lord,” Hope [1988 年], 90 - 91)

• 十二使徒定員会のパーリー・P・ブラット長老 (1807 - 1857 年) は、御霊の賜物を受けて生活するときどのような影響があるかについて次のように語っている。「聖霊の賜物は、これらのすべての器官や属性に適応できる。この賜物はあらゆる知的な能力を活発にし、生まれながらのあらゆる情感や愛情を豊かにし、伸ばし、拡大し、清め、知恵の賜物によって正しく使えるようにそれらを順応させる。また、同情心や喜び、好み、親近感、情愛などを刺激し、はぐくみ、高め、十分に発達させる。さらに、徳や親切、善行、思いやり、寛大さなどを喚起する。人の美しさや外観^{ようぼう}を磨く。健康、活力、生氣、社交性を育成する。心身両面のあらゆる能力を活気づける。体力や精力を強め、活力を与える。要するに聖霊の賜物は、昔も今も、骨に髓を、心に喜びを、目に光を、耳に音楽を、すべての人に命を与えるのである。」(Key to the Science of Theology [1979 年], 61)

モロナイ 10:20 - 21 信仰, 希望, 慈愛

• 十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老 (1917 - 2008 年) は、信仰、希望、慈愛が、段階を追って増し加えられていくことについて話した。

「主の戒めを守るなら、信仰と希望と慈愛がわたしたちの内にとどまります。これらの徳は『天からの露のように [わたしたち] の心に滴』り (教義と聖約 121:45), わたしたちは、『きずも、しみもない』 (1 ペテロ 1:19) 状態で、主であり救い主であるイエス・キリストの御前^{みまえ}に自信をもって立つ備えをするのです。

これが、わたしたちが尋ね求める徳高く、好ましく、称賛に値する特質です。わたしたちは皆『愛はいつまでも絶えることがない』 (1 コリント 13:8) というパウロの教えをよく知っています。確かに、わたしたちは日々の生活の中で、

尽きることのない霊的な力を必要としています。モロナイは『信仰と希望と慈愛が「わたしたち」を「主」のもとに、すなわち、あらゆる義の源に導く』（エテル 12：28）という啓示の言葉を書き記しています。

今主の教会として地上に回復されている、この末日聖徒イエス・キリスト教会は、わたしたちを救い主のみもとへ導き、これらの神聖な特質を育て、養い、強める助けを与えてくれます。』（『聖徒の道』1999年1月号、27－28）

モロナイ 10：22 「絶望は罪悪のために生じる」

• エズラ・タフト・ペンソン大管長（1899－1994年）は、絶望を避けるために善を行う必要があることについて、次のような考えを述べている。「モルモン書の中に、『絶望は罪悪のために生じる』（モロナイ 10：22）という言葉が書かれています。またアブラハム・リンカーン大統領は次のように言っています。『善いことをしたときは気持ちも良いが、悪いことをしたときには気持ちも悪い。』罪悪は人を絶望と落胆の縁へ引きずり込むものです。そして罪悪を犯して一時的な快樂を得たとしても、結局は不幸に終わってしまうのです。『罪悪は決して幸福を生じたことがない。』（アルマ 41：10）罪悪は神の業と調和しないばかりか、むしろ霊を弱めるものです。したがって、人はいつも神のすべての律法と調和しているかどうか自らをよく吟味しなければなりません。わたしたちが守るあらゆる律法には、それ相応の祝福があります。しかし律法を守らなければ、必ずそれ相応の挫折^{させつ}を身に招くことになります。絶望という重荷を背負っている人は、主のもとに来てください。主のくびきは負いやすく、その荷は軽いからです（マタイ 11：28－30 参照）。」（『聖徒の道』1987年3月号、2）

モロナイ 10：27 「あなたがたは、神の法廷でわたしに会うであろう」

• 数人の預言者は靈感を受け、モルモン書を読む人に、裁きの日に神の法廷で会うこと、そのときに主が彼らの言葉が真実であることを証^{あかし}してくださることを証している。ニーファイ（2 ニーファイ 33：10－14 参照）、ヤコブ（ヤコブ 6：12－13 参照）、そしてモルモン（モルモン 3：20－22 参照）など、モルモン書のほかの預言者も、同じようなことを語った。

モロナイ 10：7－8, 18－19, 26, 30

繰り返しは、聖文で使われる重要な教授法である。
モロナイが何度も繰り返して使った勧めるという言葉は、わたしたちに何をなすように教えているか。

モロナイ 10：31－32 「キリストのもとに来て、キリストによって完全になりなさい」

• 七十人定員会会員として奉仕していたとき、ウィリアム・R・ブラッドフォード長老は、わたしたちがモロナイの最後の勧告に従うべき理由を説明した。



ウィリアム・R・ブラッドフォード、© JRI

「義にかなった生活を送ろうと努力するときに、大きな喜びと幸せが得られます。簡単な言葉で言えば、神の子供たちに対する神の計画とは、この地上に生まれ、律法を学び、律法に従って生きるために全力を尽くすということです。そして全力を尽くした後で初めて、救い主イエス・キリストの贖いの力が十分に発揮

され、その力により人は自分一人ではなし得なかったことをすべて行うことができるのです。……

義にかなった生活を送る努力をするとは、わたしたちにできることをすべて従順に行う努力をするということです。そうすることによって、全力を尽くすならば、神の計画がわたしたちの益となるような形で成就するという、内面的な平安や慰めがもたらされるのです。人の心に生ずるいかなる感情も、義人となるべく最善の努力をしているという喜びと幸せに勝る思いをもたらすことはできません。』（『聖徒の道』2000年1月号、102－103）

• ゴードン・B・ヒンクレイ大管長は、総大会を閉会するに当たり、わたしたちがほかの人々を祝福できるような生活することにより、救い主のもとに来る必要性について述べた。「この大会で見聞きたことによって、皆さんの生活に変化が訪れることを祈っています。一人一人がもう少し優しくなり、もう少し思いやり深くなり、もう少し礼儀正しくなれますように。また、自分の言葉を吟味し、怒りにまかせて言葉を発してしまい、それを後悔することのないように祈っています。もう片方の頬をも向ける強さと2マイル行く意思をもって生活し、嘆き悲しむ人の弱くなったひざをまっすぐにすることができるようになります。」（『リアホナ』2003年11月号、103）

モロナイ 10：32－33

モロナイは、「染みのない清い者」になるためにしなければならぬ幾つかの事柄を挙げている。それらは何か。それらを生活の中でどのように応用できるか。

モロナイ 10：32－33 「神の恵みにより」

• 十二使徒定員会の M・ラッセル・バラード長老は、善い行いには、キリストの恵みが伴わなければならないと話した。「イエス・キリストの無限の贖罪しよくざいによらなければ、人は悪い選択の結果を克服することはできません。……どんなに熱心に働こうと、どんなによく従おうと、どんなに多くの善行をこの世でなそうとも、もしイエス・キリストとその愛に満ちた恵みがなければ、十分ではないのです。何を成し遂げたとしても、自分の力では、神の王国を受け継ぐことはできません。残念ながら、教会員の中には、善を行うことに没頭しすぎるあまり、それがどんなに善い行いであろうと、完全に主に頼りながら行わないかぎり、それらはむなしなものになってしまうことを忘れてしまっている人がいます。」（“Building Bridges of Understanding,” *Ensign*, 1988 年 6 月号, 65）

モロナイ 10：34 イエス・キリストについてのもう一つの証あかし

• 「モルモン書のタイトルページには、モルモン書の目的の一つは『ユダヤ人と異邦人にイエスがキリストであ……ること』を確信させることであると書かれています。このことに焦点を当てて、モルモン書についての証をまとめるために、以下の事実について考えてください。モルモン書の中の 6,607 節のうち、3,925 節にイエス・キリストの名前が含まれています。これはつまり、キリストの名前が何らかの形で、1.7 節に 1 度書かれているということです。」（スーザン・ワード・イーストン, “Names of Christ in the Book of Mormon,” *Ensign*, 1978 年 7 月号, 60－61）



理解を深めるために

- 人生の今の時期、あなたが最も必要だと感じるのはどのような御霊みたまの賜物たまものだろうか。天の御父から約束されているこれらの賜物を伸ばしたり、受けたりするには、何ができるだろうか。
- 「キリストのもとに来る」とはどのような意味かを理解するうえで、モロナイ 10 章は、どのように役立つだろうか（モロナイ 10：30）。
- モルモン書を読むことで、どのように「神に近づく」ことができただろうか（モルモン書序文）。自分にとって、最も意義深いと思えた聖句を幾つか書き出す。
- キリストの憐れみと、完成を目指すわたしたちの目標との間にはどのような関係があるだろうか。

割り当ての提案

- 毎日、主題を決めて、あるいは最初から順に、モルモン書を研究する時間を決めたり、予定を立てたりする。
- 祝福師の祝福を読み返す。家族など、あなたを最もよく知っている人と話し、天の御父があなたに与えてくださった霊的な賜物たまものについて、彼らが気づいたことを教えてもらう。教えてもらった賜物や、そのほかあなたが得たいと望む賜物を伸ばす方法を計画する。（注意——祝福師の祝福は個人的な神聖なものであるため、その内容について友人と話したりすることがないようにする。）